様式Ｃ－１９

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２４　年　５　月　２５　日現在

機関番号：２４４０３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009　～　2011
課題番号：２１５３０５９４
研究課題名（和文）地域福祉に「ソーシャルクオリティ」概念の活用をはかるための調査研究

研究課題名（英文）　A study to put Social quality to practical use in community based welfare

研究代表者
小野　達也（ONO　TATSUYA）
大阪府立大学人間社会学部・准教授
研究者番号：３０３２０４１９

研究成果の概要（和文）：
本研究は「ソーシャルクオリティ」という概念を地域福祉の実践で活用できるようにすることを目的にしている。ソーシャルクオリティでは、社会を生活世界とシステムという観点から把握する。本研究は理論的な検討とパイロット的な調査を行って、対人援助レベル、地域活動レベル、そして地域社会レベルというそれぞれのレベルにおいて、ソーシャルクオリティ概念が活用できる枠組みを提示することができた。

研究成果の概要（英文）：
This study aims to enable the application of the Social Quality theory, which views the society from the perspective of “life-world” and “system”, to community practice in community based welfare. Through a theoretical study and a pilot investigation, a framework to utilize the theory at personal support level, community action level and local community level has been derived.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２００９年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| ２０１０年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| ２０１１年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 1,500,000 | 450,000 | 1,950,000 |

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会福祉
キーワード：地域福祉、生活世界、システム

１．研究開始当初の背景

（１）小さな政府の方向が惹き起こす諸問題

格差問題や社会的排除は近年わが国でも注目されているが、ヨーロッパ諸国では 1980 年代以降、福祉国家の見直しが進む中でこうした問題が意識されてきた。失業、ホームレス、医療や教育へのアクセスなど社会的な環

境の変化による生活上の問題が顕著に生じてきた。これに対して、社会発展と経済のバランスを考える新たなアプローチが必要性と考えたヨーロッパ諸国の学者たちによってソーシャルクオリティの考え方は生み出された。1997 年に、ヨーロッパの 1000 人以上の科学者の署名を集めて、人間の尊厳に関する「アムステルダム宣言」が出され、ソーシャルクオリティの基本的立場が示された。その活動を展開していく拠点となる財団もオランダで設立され、書籍や広報誌の発行、調査活動、諸国での研究会の開催などが進められている。

（２）ソーシャルクオリティの考え方

ソーシャルクオリティは個人と社会の双方を視野に入れる包括的な概念である。それは個人が自己実現することと社会が発展することを目指す考え方である。社会は実在すると考えるが、それは固定した、静的なものではなく、個々人が相互行為するプロセスとして理解される。これは新自由主義的な社会の不在、という立場とは鮮明に異なっている。また、アムステルダム宣言には倫理的な主張が掲げられ、とくに人間の尊厳が重視されており、そこから社会の質の向上に必要な条件が引き出されている。

ソーシャルクオリティの考え方は、個人と社会の軸、そしてシステムと生活世界の軸により区切られた４象限で示される。

タテ軸は、個人の発展と社会の発展を示しており、この両者は緊張関係にある。個人の持つさまざまな価値と社会的な規範をいかに両立させるかが問われることになる。ヨコ軸はシステムと生活世界のあいだの緊張関係である。これはドイツの社会哲学者ユルゲン・ハーバーマスの理論に基づいているが、このヨコ軸でもシステム統合と社会統合（生活世界）の関係が課題となっている。

２．研究の目的

これまでにソーシャルクオリティを地域福祉分析に適用するための基礎検討を行ってきた。本研究は、その上にソーシャルクオリティ概念を地域福祉実践に役立てることができるようなモデルを構築することを目指している。そのための鍵となるのは次のような点である。ソーシャルクオリティでの生活世界とシステムが地域生活に大きくかかわっている。とりわけ生活世界はコミュニケーションによる調整を可能にする場と考えられるために、地域福祉での生活世界の意義に着目し、その現状と課題、可能性を明らかにする。具体的には、地域の人びと（生活世界）のニーズや要望は社会的に受け止められているのか、それとも周辺化され、無視されているのか。地域の住民組織やＮＰＯは生活世界からのニーズや要望に対してどのような働きをしているのか。ソーシャルワーカーは生活世界からのニーズや要望を実現するためにはどのような福祉的援助実践を行っていけばよいのか。こうした事柄の究明を通して、ソーシャルクオリティを地域福祉の現場で活用できるようにすることが本研究の目的である。

３．研究の方法

（１）地域での生活世界とシステムの関係性の理論的整理

ソーシャルクオリティに関して基礎的な文献などにより生活世界とシステムの関連の整理が重要なことがわかってきた。この両者のバランスが地域生活に大きな影響力を持つということである。地域福祉を高めていくためにはこの生活世界とシステムのバランス、相互関係はどのようであればよいのだろうか。さらに、生活世界が住民たちのコミュニケーションによる場であるならば、それによるシステムの制御は可能だろうか。シス

テムの制御という点に関しては、市場や政府のあり方に影響を与える「あらたな公共」という課題も生まれてくる。これらの点について理論的に整理する必要がある。これは地域での自発的な活動を評価する基準にもつながっていく。地域福祉分野では、社会的排除については研究の蓄積も生まれてきている。また、あらたな公共という点への注目も高まってきている。しかし、生活世界とシステムの概念を地域福祉に引き付けて理論的に考察することは斬新なものといえる。

（２）ソーシャルクオリティの枠組みを使った調査の検討を行う

ソーシャルクオリティの概念の地域福祉での活用可能性を考えるために次の３つのレベルでの調査を考える。

①地域社会レベル

地域社会全体をソーシャルクオリティの概念を使って把握、分析する調査である。その空間的な広がりは調査目的に応じて異なってくるが、日常生活圏域、あるいは小学校区から市町村の範囲が基本となる。その際の調査の枠組としては、経済・社会保障、ソーシャルインクルージョン、社会凝集性、そしてエンパワメントである。これらが地域社会でどのように配置されているのか、その量やバランスを検討することになる。

②小地域実践レベル

地域社会の質を向上させるためには、生活世界のニーズや声が社会的に受け止められていくことが不可欠である。この課題はどのように取り組まれているのか検討するために地域の住民組織の調査を行う。現在、住民参加型の地域活動として小学校区（時には中学校区）レベルでの組織的な取り組みが行われている。これは地域によって、学区社協、小地域社協、校区社協、校区福祉委員会などと呼ばれている。こうした地域での組織活動がソーシャルクオリティにとってもつ意味を考えるためにも、特にそのリーダー層に対してインタビュー調査を行う。

③地域での個別支援レベル

近年、地域を基盤としたソーシャルワーク、個別支援が展開され始めている。こうした個別支援は、ソーシャルクオリティからすればどのように評価できるのか。この点を考察するために、地域での個別支援の事例を取り上げて、質的な調査、事例検討を行う。その際には、実際の地域での援助者とともに作業を進める。

４．研究成果

（１）理論的枠組みの整理

ソーシャルクオリティの概念は、ヨーロッパで生まれたために、それを日本の地域福祉で活用するには、理論的な検討が必要となる。こうした点を整理したことで、ソーシャルクオリティの４象限での指標を仮説的に示すことができた。また、特に生活世界とシステムのかかわりに注目して、地域福祉での実践において、生活世界の持つ意味に関する重要性を指摘した。

（２）共同による地域調査の実施

地域福祉での実践につなげるために、地域福祉に係る専門職である社会福祉協議会の職員と共同で地域調査を行うことができた。その際にはソーシャルクオリティを調査で活用する上で、子育て、教育、交通、地域組織という４つのテーマを立て、各チームでの調査を行った。各テーマでのソーシャルクオリティを把握して、その分析、および改善のための提言案を作成した。

（３）個別支援分析への援用

ソーシャルクオリティの中でも生活世界の考え方に着目し、地域での個別支援のケース分析を実践者とともに行った。これにより、

地域でのミクロレベルでの個人支援に関してもソーシャルクオリティの概念を援用することの可能性を確認することができた。ただし、この援用については、まだパイロット的な研究の段階にある。

（４）地域福祉分析の枠組みの提示

地域福祉の多様なレベルに、ソーシャルクオリティを活用する枠組みを提示することができた。具体的には、地域での個人支援を行うミクロレベル、住民参加型の活動が展開されるメゾレベル、そして地域社会総体を対象とするマクロレベルである。また、それぞれのレベルにおいて、試行的な調査も実施することができた。こうした枠組みについては、その成果を報告書や論文としてまとめて発表した。

（５）今後の展望

具体的に地域のソーシャルクオリティの調査をさらに実施する予定である。これにより理論の精緻化をはかるとともに、ソーシャルクオリティを向上するための実践的援助について研究を進める段階となってる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

① 小野達也、水俣から福島へ～地域開発と補償をめぐって～、地域福祉研究、日本生命済生会、査読無、40 巻、2012、50－59

② 小野達也、島根県における病院への地域・住民参加、山陰研究センター報告書、査読無、2012
http://www.comde.co.jp/NHSDATABASE/PDF/2011kenkyuhoukoku.pdf

③ 小野達也、生活世界の概念を活用した地域福祉分析の枠組み、社会関係研究、熊本学園大学、査読無、第 16 巻第 2 号、2011 年、1－22

〔学会発表〕（計　４件）

① 小野達也、ボランティア概念をめぐるあらたな検討：生活世界の視座の実践性、日本ボランティア学会 2011 年度大会、2011 年 6 月 26 日、立命館大学

② 小野達也、「生活世界からの地域福祉論」の構築に関する基本的考察－ハーバーマス理論からの示唆－、日本地域福祉学会第 25 回大会、2011 年 6 月 5 日、東洋大学

③ 小野達也、「生活世界からの地域福祉論」構築のための理論的枠組みの検討、日本地域福祉学会第 24 回大会、2010 年 6 月 13 日、敬和学園大学

④ 小野達也、ソーシャルクオリティの枠組みを使った地域社会の分析、日本ボランティア学会 2009 年度大会、2009 年 6 月 28 日、和歌山県龍神行政局

〔その他〕

①科学研究費補助金研究成果報告書の発行、「地域福祉に「ソーシャルクオリティ」概念の活用をはかるための調査研究」2012 年 3 月

②学術的研究会での発表、大阪社会福祉研究会「生活世界からの地域福祉論の構築」2011 年 10 月 15 日、大阪市社会福祉情報研修センター

６．研究組織

(1)研究代表者

小野　達也（ONO　TATSUYA）
大阪府立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：３０３２０４１９

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：